御所市文化財調査報告書　第44集

奈良県御所市（ごせ）

名　柄　遺　跡

－第7次発掘調査報告－

平成25年（2013年）3月
御所市教育委員会

例　　言

1　本書は、コンビニエンスストア建築を目的とした工事に伴う事前調査として、株式会社ローソンの委託を受けて御所市教育委員会が実施した、御所市大字名柄 147- 4 番地ほかに所在する名柄遺跡の第 7 次発掘調査報告書である。

2　調査の体制等は次の通りである。

調査主体　御所市教育委員会　　調査担当　御所市教育委員会
文化財課技術職員　金澤雄太

調査期間　平成 24 年 5 月 28 日～6 月 5 日　　調査面積　149㎡

3　現地での写真撮影、および遺物の撮影は金澤が行った。

4　本書の執筆・編集は金澤が行った。

5　本発掘調査に関わる記録類および出土遺物は、御所市教育委員会文化財課にて保管している。

6　現地調査及び本書刊行にかかる費用は、株式会社ローソンがすべて負担した。関係各位にご理解、ご協力いただいたことを記し、深謝いたします。

7　遺物実測図の断面は、土師器を白抜き、須恵器を黒塗り、陶器を網掛けとした。

目　　次

例言
1．位置と周辺の遺跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
2．既往の調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
3．調査の経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
4．各トレンチの調査成果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
5．遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12
6．総括・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・17
参考文献
図版

図版　目次

図版１　１　１トレンチ全景 (南西から)
　　２　１トレンチ流路断面 (西から)
　　３　１トレンチ暗渠 (南西から)
　　４　２トレンチ全景 (北西から)
図版２　１　３トレンチ全景 (東から)
　　２　同 (北から)
図版３　１　３トレンチ溝１～３ (南東から)
　　２　３トレンチ溝４ (北西から)
　　３　３トレンチピット１（西から）
　　４　３トレンチピット２（東から）
　　５　４トレンチ全景（南東から）
図版４　１　溝３・ピット１の出土遺物（S ≒ 1/3）
　　２　流入土・遺構基盤層の出土遺物（S ≒ 1/3）
図版５　流入土の出土遺物（S ≒ 1/3）

挿図　目次

図１　名柄遺跡の位置・・・

1．位置と周辺の遺跡

（1）位置（図1）

御所市は奈良県の中部に位置する面積60.58km^{2}の都市であり、北は葛城市・大和高田市、西は大阪府千早赤阪村、南は五條市、東は橿原市・高取町・大淀町に接している。市域の北部は低平な奈良盆地の西南端に位置し、西部には金剛・葛城山がそびえ、南東部には竜門山地西端にあたる巨勢山などの丘陵に跨る。地形的には、市の南に中央構造線がはしる、内帯と外帯の接する地域といえ、自然景のみならず人々の生活や風習等において奈良盆地と吉野山地との漸移・連結地帯をなしている。また、盆地各所への利便性もさることながら、西は金剛・葛城山の間にある水越峠を通じて大阪方面へつながり、南は風の森峠を越えて五條・吉野・和歌山方面へ至る、交通の結節地としても重要な役割を果たしている。

今回調査を行った名柄遺跡は金剛・葛城山の東麓斜面上に位置する。上述の水越峠を大阪側から越えた玄関口にあたり、遺跡からは北東方向に奈良盆地の平野部が一望できるなど、枢要な立地といえる。

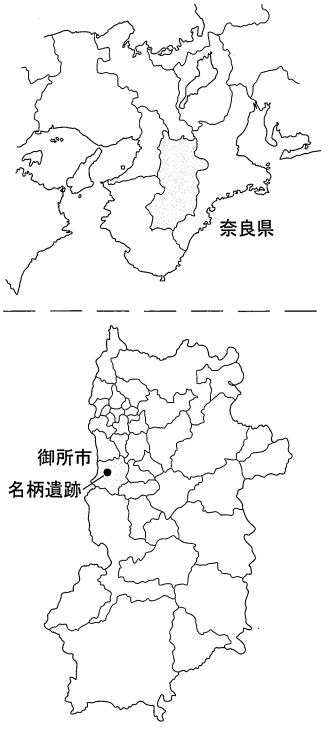


図1　名柄遺跡の位置

（2）周辺の遺跡（図2）

御所市域では旧石器時代の遺跡は現状で確認されておらず、縄文時代になって初めて人類の痕跡を見出すことができる。特に近年の発掘調査において明確な遺構が明らかとなってきており、観音寺本馬遺跡や玉手遺跡において晩期の平地式住居や土器棺墓群が検出されている（木許ほか2009・2010、本村2009）。また、伏見遺跡では中期末～後期中葉（廣岡・十文字2005）、南郷遺跡地蔵谷地区では中期末～後期初頭の土器が多く出土しており（坂編2000）、付近に集落の存在が窺われる。縄文時代の遺物の出土は山麓部を中心に比較的多く認められ、後期～晩期のものが多い中で前期に遡るものも少数ではあるが玉手遺跡などで確認されている（松田1997）。

弥生時代の代表的な遺跡には鴨都波遺跡があり、遺構や遺物の豊富さから弥生時代を通じて営まれた拠点的大集落と考えられる（木許編1992、藤田・尼子編1992ほか）。高地性集落では、巨勢山丘陵上に巨勢山境谷遺跡（藤田編1985、木許編2007ほか）、巨勢山中谷遺跡（御所市教育委員会1989）、巨勢山八伏遺跡（御所市教育委員会1990）などが後期になって営まれることが知られている。また、名柄遺跡よりやや南西のところでは外縁付鈕Ⅱ式の銅鐸と多鈕細文鏡が発見されており、青銅器埋納地として古くから著名である（高橋1919）。近年の発掘調査では、中西遺

跡において約 20,000m^2 以上の広がりをもつ水田遺構が確認された（奈良県立橿原考古学研究所 2011）。これは全国でも最大規模のものであり、中西遺跡周辺が有数の穀倉地帯であったことを示していると考えられる。

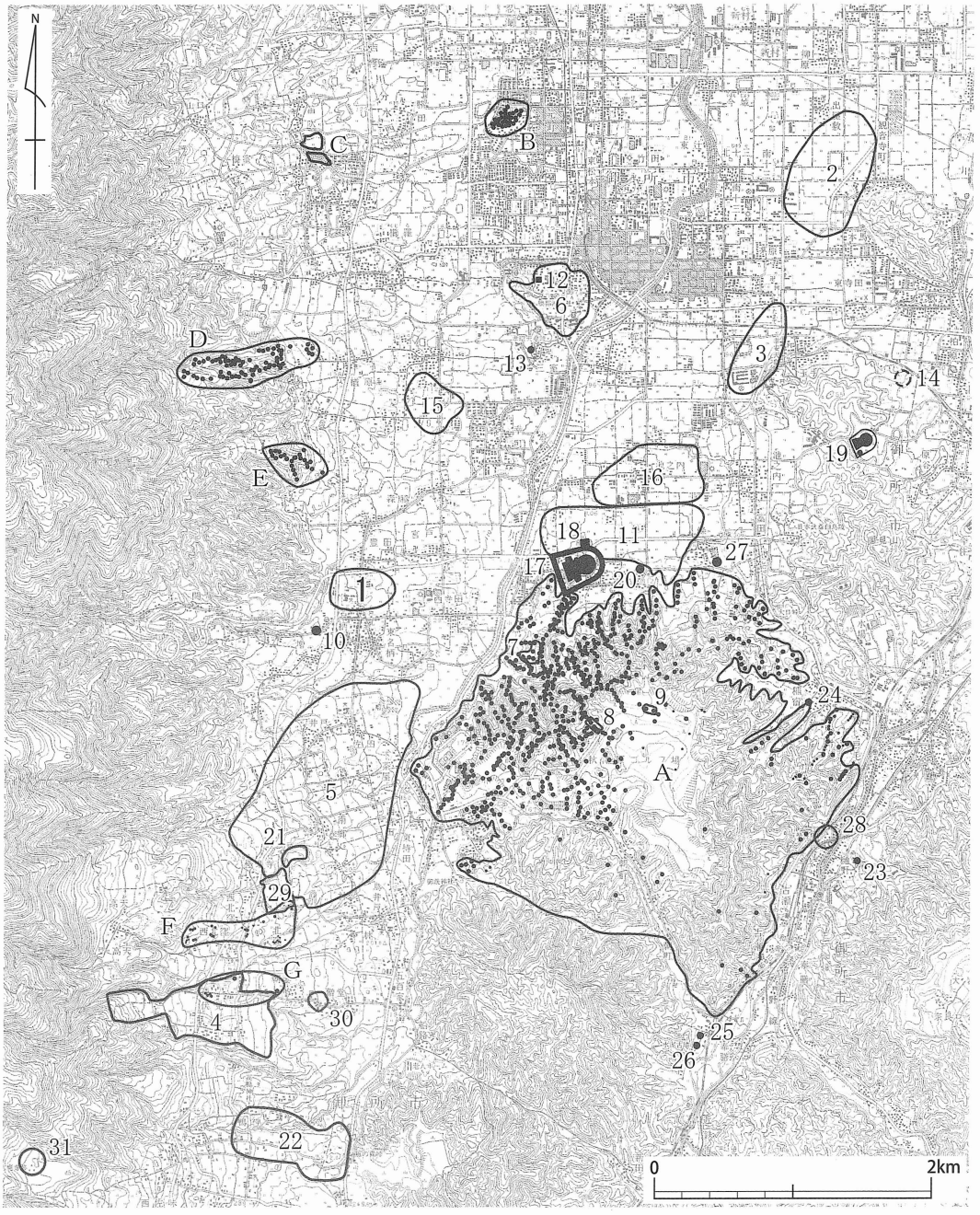
古墳時代に入ると、前期では鴨都波 1 号墳が著名である（御所市教育委員会編 2001）。一辺約 20 mの小規模な方墳ながら、4 面の三角縁神獣鏡や方形板革綴短甲、漆塗りの靫といった豊富な副葬品が出土した。墳丘と副葬品に見られる格差は当該期の南葛城地域を考える上で重要な視点となろう。その他にも西浦古墳（梅原 1922）やオサカケ古墳（島本 1938）、巨勢山 419 号墳（藤田編 2002）などが前期の古墳として知られているが、資料状況が良くないこともあり鴨都波 1 号墳との関係を含めて十分に検討が及んでいない。

集落に関しては鴨都波遺跡において若干様相がわかっているものの（豊岡 1989、藤田・尼子編 1992）、その他の遺跡に関しては顕著な遺構は認められず、楢原遺跡において土坑からまとまった土器が出土している程度であった（藤田編 1994）。しかし近年の発掘調査によって、秋津遺跡から前期前半の方形区画施設や多数の掘立柱建物が検出され（米川・菊井 2010）、名柄遺跡から前期前半の住居や良好な土器群が検出されるなど重要な成果があがってきている（佐々木 2012）。

中期になると、突如として墳長 238 mを誇る大前方後円墳の室宮山古墳が築造される（秋山・網干 1959、木許編 1996、藤田・木許編 1999）。北側の周堤に接するネコ塚古墳という陪冢をもち（梅原 1922、関川 1989）、埋葬施設には長持形石棺を納めた竪穴式石室を有するなど南葛城地域の中でも隔絶した内容であり、その出現に対する歴史的評価は今後も慎重に議論していく必要がある。その後は、やや規模を縮小させながらも墳長 149 mの前方後円墳である掖上鑵子塚古墳が築造されるが（楠本編 1978 ほか）、その立地が曽我川流域へと移る点は先行する室宮山古墳との関係を考える上で注意が必要である。また、室宮山古墳の東側に位置する径約 50 mの円墳であるみやす塚古墳も、室宮山古墳との前後関係が難しいが興味深い存在である（網干 1959）。

中期の集落としては、金剛山東麓の扇状地上に広がる南郷遺跡が特筆されよう（坂編 1996 ほか）。広い範囲に居住・生産・祭祀の要素が散在しているとともに、渡来系要素の強い集落であり、葛城氏の支配拠点と考えられている。南郷遺跡内に所在する極楽寺ヒビキ遺跡では、室宮山古墳で出土した家形埴輪に類似する構造の建物跡が検出され、古墳に葬られた被葬者と集落との関係を考える上でこの上ない成果といえる（北中編 2007）。その他にも、名柄遺跡で首長居館と考えられる遺構が（藤田 1991）、鴨神遺跡において中期後半と考えられる道路遺構が（近江 1993）、中西遺跡で複数棟の竪穴住居が確認されている（木許 1991、木許ほか 2010）。

後期は大型古墳の分布が変化し、巨勢谷に大型の横穴式石室墳が築造されるようになる。主要なものとして、権現堂古墳（佐藤 1916、河上 2001）、新宮山古墳（奈良県教育委員会 1980 ほか）、水泥北古墳、水泥南古墳（網干 1961b ほか）があげられ、高取町域の市尾墓山古墳、市尾宮塚古墳なども含めて巨勢氏との関連が考えられる。地理的にはやや離れるが、巨大な横穴式石室をもつ



1. 名柄遺跡　2. 観音寺本馬遺跡　3. 玉手遺跡　4. 伏見遺跡　5. 南郷遺跡　6. 鴨都波遺跡　7. 巨勢山境谷遺跡
8. 巨勢山中谷遺跡　9. 巨勢山八伏遺跡　10. 名柄銅鐸・銅鏡出土地　11. 中西遺跡　12. 鴨都波１号墳　13. 西浦古墳
14. オサカケ古墳　15. 楢原遺跡　16. 秋津遺跡　17. 室宮山古墳　18. ネコ塚古墳　19. 掖上鑵子塚古墳　20. みやす塚古墳
21. 極楽寺ヒビキ遺跡　22. 鴨神遺跡　23. 権現堂古墳　24. 新宮山古墳　25. 水泥北古墳　26. 水泥南古墳
27. 條ウル神古墳　28. 巨勢寺　29. 二光寺廃寺　30. 朝妻廃寺　31. 高宮廃寺跡
A．巨勢山古墳群　B．石光山古墳群　C．小林古墳群　D．石川古墳群　E．吐田平古墳群　F．北窪古墳群
G．ドンド垣内古墳群

図２　周辺の主要遺跡分布図

條ウル神古墳も石室の型式が巨勢谷のものと類似しており、その破格の規模とともに注目される(御所市教育委員会編 2003)。

群集墳に関しては、総数 800 基を超える巨勢山古墳群（藤田編 1987）や葛城山東方の独立丘陵上に立地する石光山古墳群（河上ほか編 1976)、葛城山東側斜面の尾根上に位置する小林古墳群（藤田 1987）や石川古墳群（白石 1974)、吐田平古墳群（網干 1961a)、金剛山の東側斜面尾根上に位置する北窪古墳群（末永 1932、廣岡 2002 ほか）やドンド垣内古墳群（十文字編 2007 ほか）などが存在する。これらの古墳群はおおむね古墳時代後期を中心とするものであるが、中期に造営が開始されるものや終末期にまで築造が続くものも存在している。このような状況から、この地域は後期を中心に墓域として広く利用されていたと考えられ、それらの造営主体や古墳群間の関係等については今後の調査・検討が待たれる。

後期の集落については情報が少ないが、鴨都波遺跡や南郷遺跡で竪穴住居などの遺構が確認できており、集落が継続して存在していたことがわかる（藤田・尼子編 1992、阪本編 2002、佐々木編 1999 ほか)。ただし、集落の規模などはよくわかっていないため、今後の調査成果に期待するところが大きい。

古代には寺院の造営が盛んに行われている。伽藍配置が復元できるものは巨勢寺に限られるが(河上・木下編 2004)、近年の調査で新たに検出された二光寺廃寺（廣岡 2006）では、金堂と考えられる礎石建物の一部が検出されるとともに、その周囲から多量の塼仏や瓦が出土し、大きな成果が上がっている。その出土瓦の中には、近隣の朝妻廃寺（前園ほか 1978)、高宮廃寺（松田ほか 1993）の瓦と同笵のものがあり、密接な関連を有する可能性が考えられる。

2．既往の調査（図３）

名柄の地は、上述の通り銅鐸・銅鏡の埋納地として著名である。これは大正７年の新溜池造成工事中に偶然出土したものである（高橋 1919)。一方、発掘調査はこれまで６次にわたって実施されている。

第１・２次調査（藤田 1991）は昭和 62 年 12 月～翌１月及び平成元年４月～８月に実施された、名柄小学校の増改築に伴う事前調査である。検出された遺構は、TK23 型式期の石垣を伴う濠の一部、工房跡とみられる竪穴住居、ピット群などのほか、庄内式期から布留式期の河道、縄文時代から中世までの遺物を含む河道がある。

特に TK23 型式期の遺物としては土師器・須恵器のほか、木製品として武器や機織具、農耕具、祭祀具などが出土した。さらに、上記の木製品製作時に生じたと思われる木のチップのほか、碧玉チップや鉄滓なども検出された。

以上の調査結果から、第１・２次調査地は古墳時代中期後葉の居館跡と考えられている。さらにこの居館が工房としての機能を併せもっていたことが判明したことは大きな成果であった。

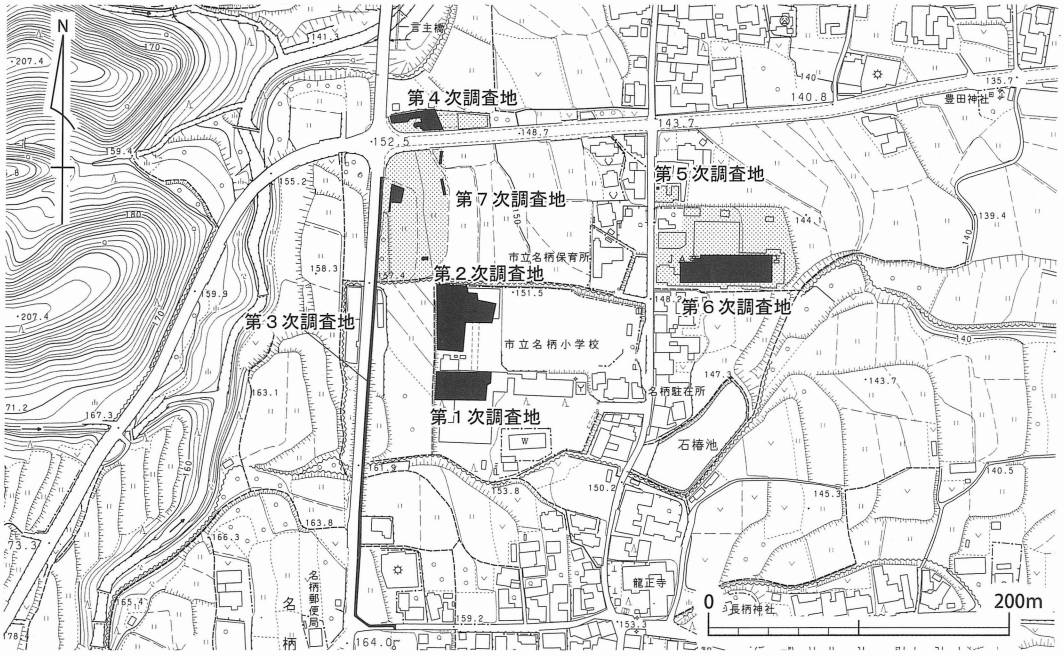


図３　調査地位置図

第３次調査は平成３年１月～２月に実施された、水道供給水管埋設に伴う事前調査である。立会調査区と発掘調査区に区分され、発掘調査区では地山上面に６世紀代のピット５基が検出された。第３次調査は第１・２次調査で検出した居館の廃絶後も遺跡としては連続しており、居館とは直接関係のない遺構が広がっていることを予測させるものであった。

第４次調査（木許 1995）は平成６年４月に実施された、ガソリンスタンドの増改築に伴う事前調査である。遺物包含層直下の地山上面で中世の溝と６世紀代の溝のほか、上限を庄内式期とするピット群が検出された。第４次調査地は上記の居館の外周部に位置するが、出土遺物に居館と併行する時期の遺物がほとんど含まれていなかったことから、居館に先行するものか、もしくは廃絶後に集落が営まれていた可能性が考えられている。

第５次調査は平成 21 年２月に実施された、個人住宅建築に伴う事前調査である。南北 1.4 m、東西 1.6 mの小規模な調査トレンチであった。現地表面から深さ約 1.1 mで地山が検出されたが、遺構・遺物は認められなかった。

第６次調査（佐々木 2012）は平成 22 年 12 月～翌３月に実施された、ＪＡならけん御所営農経済センターの建築に伴う事前調査である。検出された遺構は、中世以降の素掘溝、平安時代後期の掘立柱建物とそれを区画する溝、古墳時代前期の竪穴住居・土坑・溝、弥生時代後期の竪穴住居・土器棺墓である。古墳時代中期後葉の居館に伴う遺構は検出されなかったものの、それに先行する時期の集落様相の一部が明らかとなった。

3．調査の経過

（1）調査にいたる経緯

名柄遺跡第７次調査の契機は、平成24年１月、株式会社ローソン　代表取締役　新浪剛史氏から、御所市大字名柄 147 － 4 ほかにおけるコンビニエンスストア建築を目的とする発掘届（文化財保護法第 93 条第１項）が提出されたことによる。

今回工事計画は、該当敷地を切土・盛土によって造成した後に、店舗を建築することになっているが、建物の建築地点は盛土部分にあたり、その基礎工事はこの盛土の範囲に収まる。一方切土部分についても、大部分が現状の耕作土を鋤き取る程度の深さが掘削されるものであった。しかし、敷地西辺部では深さ 0.9 ～ 1.0 mほどの深さで切土される箇所があり、ほかにも北東部の調整池部分では 1.5 ～ 2.0 m、浄化槽部分では 3.0 mほどの深さで掘削される箇所があった。このような内容から当市教育委員会は、深く掘削が及ぶ地点について工事着手前の発掘調査が必要であるとの意見書を付して、提出された発掘届を平成 24 年１月 30 日付で奈良県教育委員会に進達した。対して、奈良県教育委員会から平成 24 年３月 19 日付で「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事について（通知）」があった。当市教育委員会からの「発掘調査の通知」は平成 24 年５月９日付で提出し、平成 24 年５月 28 日に現地での調査に着手した。

（2）発掘作業の経過

今次調査地は、古墳時代中期後葉の居館跡が検出された第１・２次調査地の北西に位置するため、それらに関連する遺構の存在が想定された。加えて、国道 309 号線を挟んだ向かい側が、居館廃絶後の遺構が検出された第４次調査地にあたることから、その時期の遺構の存在も想定することができた。発掘調査にあたっては、これらの点に留意しながら進めることとした。

トレンチの設定は工事計画に合わせて行い、敷地内北東部の調整池設置部分（以下、北側を１トレンチ、南側を２トレンチ）と西辺中央の切土部分（３トレンチ）、南東部の浄化槽設置部分（４トレンチ）にトレンチを設定した（図４）。各トレンチの掘削は重機と人力を併用して行い、層理面での遺構検出に努めるととも

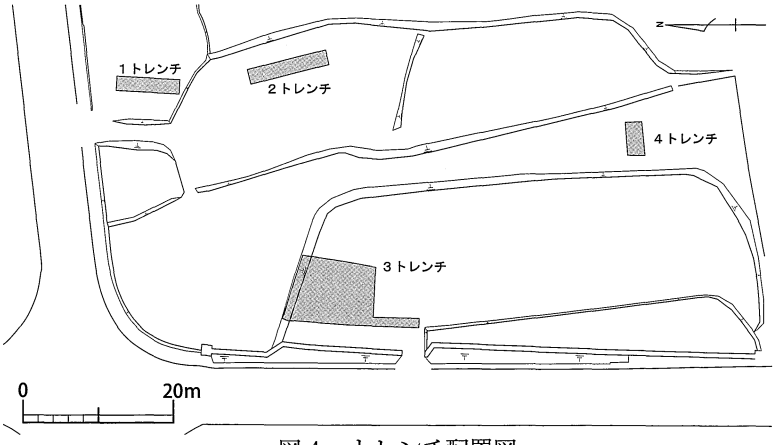


図４　トレンチ配置図

に、検出した遺構や土層の堆積状況について適宜写真・図面による記録を作成した。

以上のような経過をたどり、平成24年6月5日に現地での調査を全て終え、機材等の撤収を行った。

（3）整理作業の経過

調査終了後、直ちに報告書作成に向けての整理作業を開始した。出土遺物は細片がその多くを占めたが、若干でも器種等の情報を引き出せたものに関しては可能なかぎり図化の対象とした。

報告書の作成には各種ソフトウェアを使用し、遺物実測図の製図のみ製図ペンを用いて行った。

4．各トレンチの調査成果

（1）1トレンチ（図5）

南北8.4 m×東西1.9 mの大きさでトレンチを設定した。現地表面から30～50cmまでは耕作土や流入土と考えられる層が確認でき（1～7層）、その下にオリーブ褐色粗砂を中心とする堆積（18～21層）、最下層には茶褐色を主体に灰色や橙色の混じるシルトの地山が存在する（22層）。これら地山直上の粗砂層は後述する第2トレンチにおいても広く認められることから、正確な時期は判然としないが、ある時期に大規模な洪水等が生じた可能性が想定できる。遺構はその上面で検出され、流路と竹を用いた暗渠を検出した。

トレンチ北半で検出した流路の大きさは幅3.4 m、深さ約40cmである。埋土（10～17層）には粗砂が多くみられることから、安定した水の流れが一定程度存在していたと考えられ、一部シルト層が挟まることから、滞水状態であった時期も一定期間あったのであろう。トレンチの幅の中で流路の底の高低差は明瞭でなかったが、自然地形の傾斜から考えて西から東へ向けて流れていたものと考えられる。埋土から出土した遺物はなく、形成時期や埋没時期などは不明である。

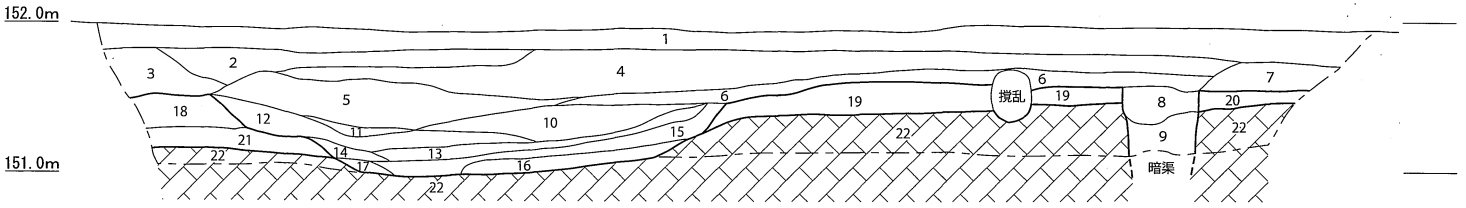
トレンチ南端では竹を用いた暗渠を検出した。トレンチの主軸に対して斜交し、検出長は約2.0 mである。19・20層の上面から幅50cm、深さ約50cmの掘り込みを行い竹を埋設するもので、埋土（8・9層）からの遺物の出土はないが近現代を遡るものではないだろう。

遺物は、流入土と考えられる層から土師器や須恵器・瓦器の破片が出土している。

（2）2トレンチ（図5）

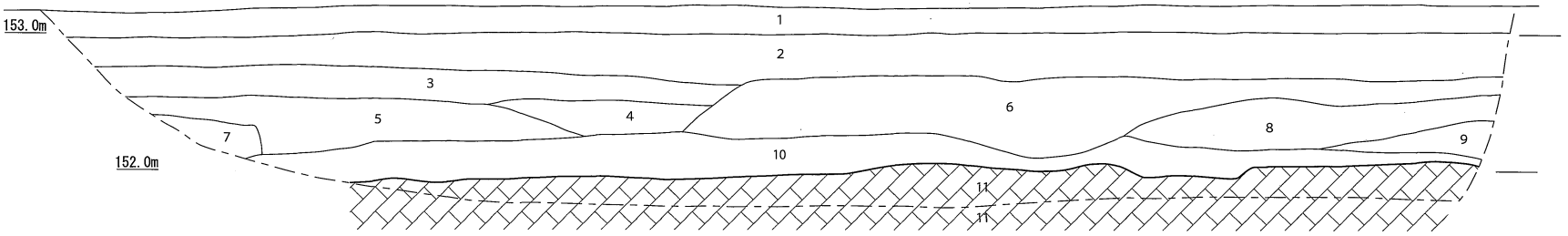
南北10.7 m×東西2.0 mの大きさでトレンチを設定した。現地表面から0.7～1.0 mまでは第1トレンチと同じく耕作土や流入土と考えられる層が確認でき（1～6層）、その下にオリーブ褐色粗砂を中心とする堆積（7～10層）、最下層に橙色シルトの地山（11層）が存在する。

遺構は検出されず、遺物も流入土と思われる層から土師器や須恵器、磁器の細片が出土しているのみである。



1トレンチ

1. 暗灰色細砂（耕作土）
2. 明黄褐色礫質細砂
3. 茶褐色礫質細砂
4. にぶい黄褐色細砂
5. にぶい黄褐色細砂
6. にぶいオリーブ褐色礫質粗砂
7. 灰色粗砂
8. 茶褐色シルト（地山起源の埋土）
9. 茶褐色シルト（地山起源の埋土）
10. にぶい灰色礫質粗砂
11. にぶい黄灰褐色粗砂
12. 灰色シルト
13. 灰色粗砂
14. 灰色粗砂
15. にぶいオリーブ褐色粗砂
16. 青灰色シルト質細砂
17. 灰色シルト
18. 茶褐色礫質細砂
19. にぶいオリーブ褐色礫質粗砂
20. 茶褐色シルト質細砂
21. 茶褐色礫質細砂
22. 茶褐色シルト（灰色・橙色シルトが部分的に混じる、地山）



2トレンチ

1. 暗灰色細砂（耕作土）
2. 茶褐色細砂
3. 茶褐色細砂
4. 茶褐色細砂
5. 暗茶褐色細砂
6. 暗茶褐色細砂
7. にぶいオリーブ褐色礫質粗砂
8. にぶいオリーブ褐色礫質粗砂
9. にぶいオリーブ褐色礫質粗砂
10. 暗黄褐色粗砂
11. 橙色シルト（地山）

0 2m

図５　１・２トレンチ東壁土層断面図

（3）3トレンチ（図6・7）

南北 18.0 m×東西 1.0 m のトレンチを設定した後、遺構の検出に伴いトレンチ北端から 12.0 mの範囲を東に約 7.0 m拡張した。現地表面から 70cm 前後までは耕作土や流入土と考えられる堆積があり（1～12 層）、その下にしまりの強い細砂である 16 層が面的に広がっている。16 層下には粗砂を中心とする堆積が続いており（17～19 層）、第1・2トレンチの地山上で認められた粗砂層と同一の性格のものである可能性が考えられる。このトレンチ内で地山は確認できなかった。

遺構は 16 層の上面で溝 4 条、ピット 2 基を検出した。それぞれの埋土には幅広い時期の遺物が含まれており、時期の確実なものは古墳時代の土師器・須恵器、中世以降の瓦器等である。遺構の基盤層となる 16 層自体にも瓦器片が含まれることから、これらの遺構の時期は少なくとも中世以降であるといえる。溝 1～3 は同一軸で平行することから同時期のものと考えられ、溝 4 を溝 1～3 が切っている点に先後関係を見出せる。溝とピットの時間的関係は判然としないが、溝 4 とピット 1 の埋土が同一の暗灰褐色礫質細砂であることから、同時期の遺構である可能性が考えられる。ただ

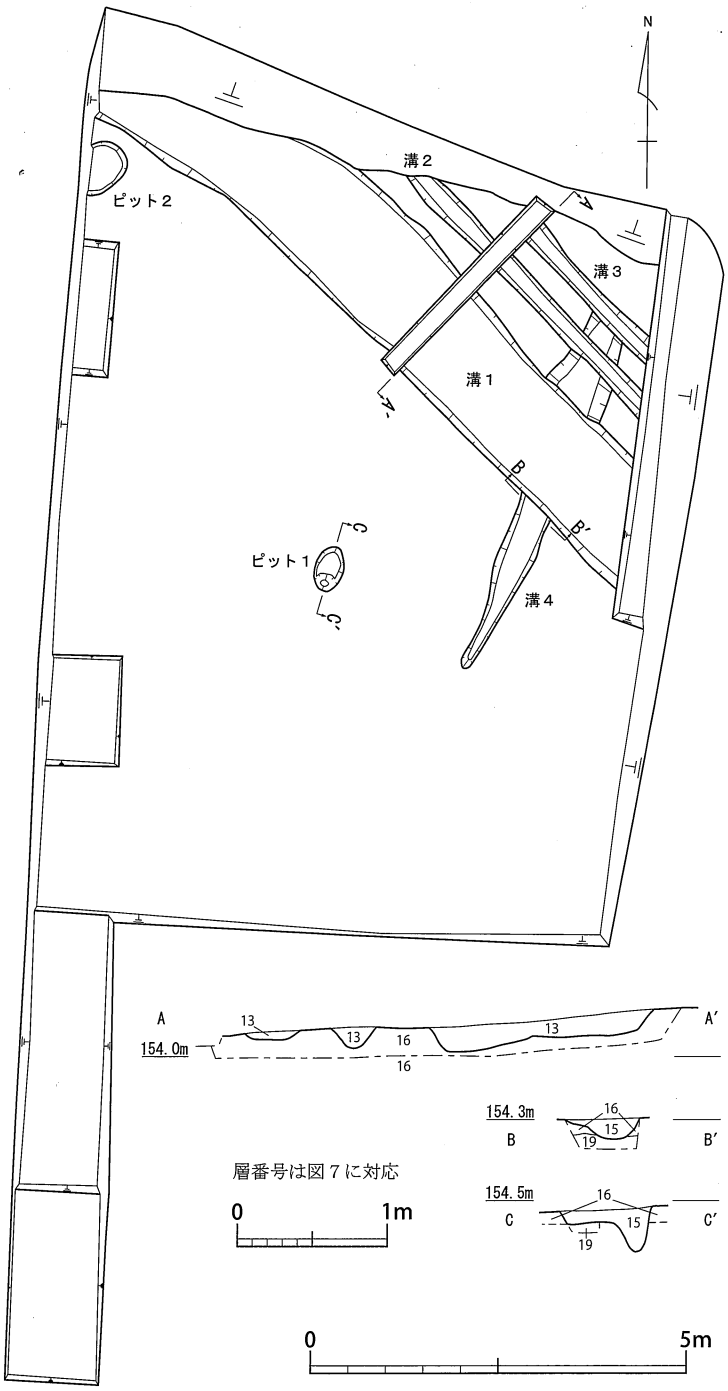
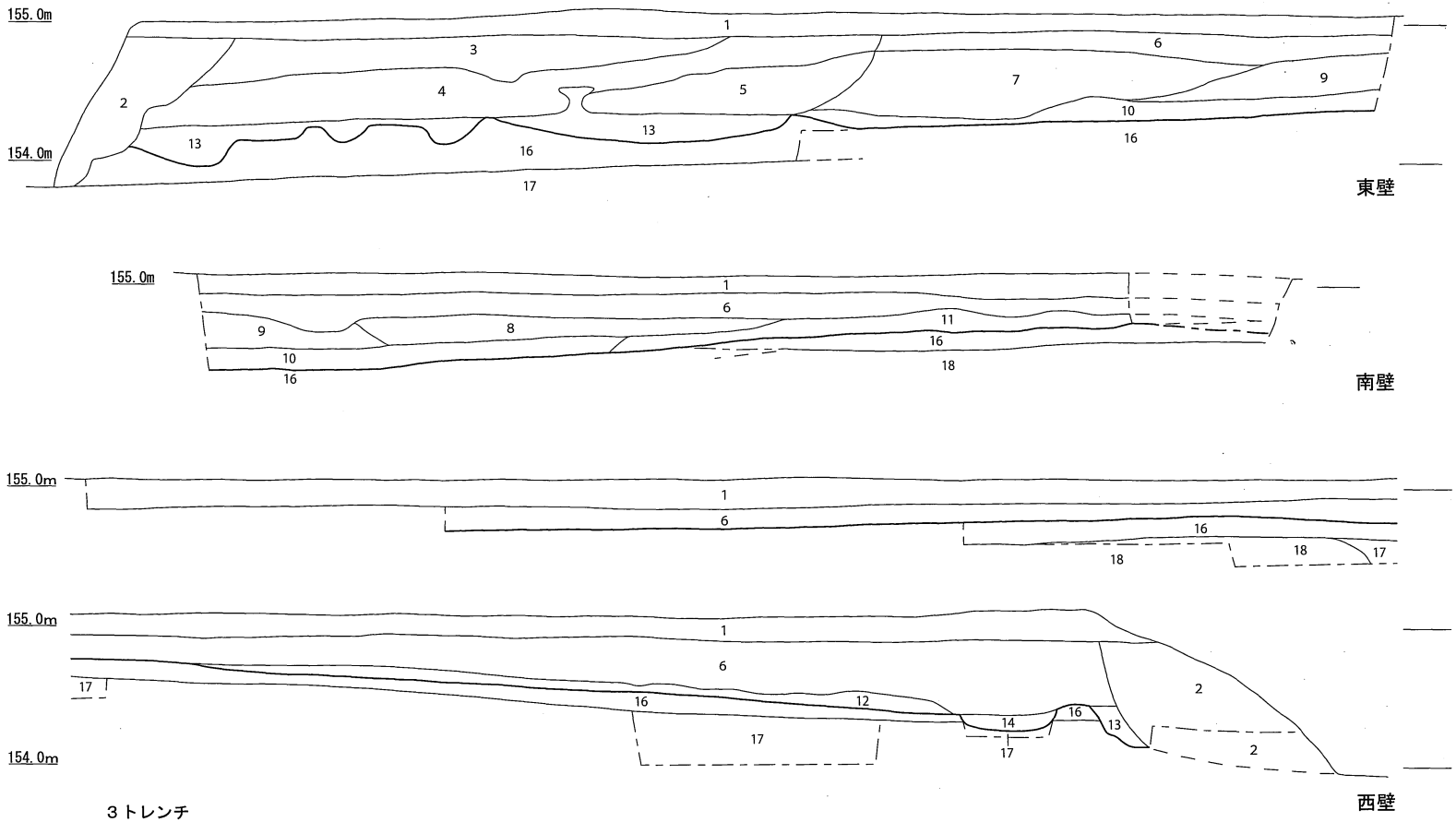


図6　3トレンチ平面図・遺構断面図



3トレンチ

1. 暗灰色細砂（耕作土）
2. 暗黄褐色細砂（造成土）
3. 暗茶褐色細砂
4. 茶褐色シルト質細砂
5. 黄茶褐色細砂
6. 茶褐色細砂
7. 暗茶褐色細砂
8. 暗茶褐色細砂
9. 暗茶褐色細砂
10. 暗灰褐色礫質細砂
11. 暗茶灰褐色礫質細砂
12. 暗灰褐色礫質細砂
13. 暗茶褐色シルト質細砂
14. 茶褐色礫質細砂
15. 暗灰褐色礫質細砂
16. 暗黄灰褐色礫質細砂（遺構基盤層）
17. 淡黄灰褐色礫質粗砂
18. 明茶褐色礫質細砂
19. 暗黄灰褐色礫質粗砂

図7　3トレンチ土層断面図

し、それぞれの遺構の性格に関しては明確にはできなかった。以下、各遺構の詳細を述べる。

溝１～３はトレンチ北半で検出した北西から南東方向にのびる素掘溝で、平行する検出状況や同一の埋土であることから、同一時期に存在したものと考えられる。それぞれの規模は、溝１が検出長 9.3 m、幅約 1.4 m、深さ 15～20cm、溝２が検出長 4.5 m、幅約 30cm、深さ約 15cm、溝３が検出長 2.3 m、幅約 30cm、深さ約 10cm である。溝１は２・３に比して幅が広いが、北西側の溝底に認められる凹凸を考慮すると、本来は数条の素掘溝であったものが、削平等により一体のものとなってしまった可能性が考えられる。これらの性格は明確にし難いが、おそらく中世以降の耕作に伴う鋤溝と考えられよう。埋土からは古墳時代の須恵器杯身片や中世の瓦器片などが出土した。

溝４はトレンチ東辺に沿って検出した南北方向にのびる溝で、溝１～３に切られている。検出長 4.8 m、幅 50～90cm、深さ約 15cm であり、溝１～３に比べ不整形な形状を呈する。埋土からは高杯などの土師器細片が出土した。

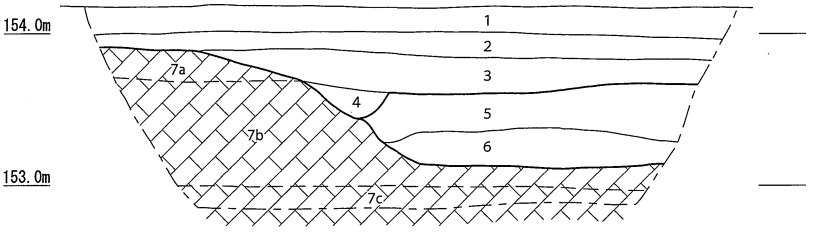
ピット１はトレンチ中央で検出した、長径 61cm、短径 35cm、深さ 9 cm の平面楕円形を呈するもので、南端のみ深さ 28cm と深くなっている。埋土からは古墳時代の須恵器杯身片や時期不詳の土師器片などが出土した。

ピット２はトレンチ北西端で検出した。トレンチ西壁にかかっているため正確な数値ではないが、長径約 70cm、短径約 60cm、深さ 10cm の平面楕円形を呈する。埋土からは土師器細片が出土した。

（４）４トレンチ（図８）

南北 2.2 m×東西 4.4 mの大きさでトレンチを設定した。現地表面から 50cm の深さまでは耕作土や流入土と考えられる細砂層が確認でき（１～３層）、その下にはシルトを中心とする５・６層が 50cm 程度の厚さで堆積している。このシルト層の性格は判然としないが、５層の上面で幅 50cm、深さ 20cm 弱の溝状の掘り込みが認められた。埋土からの遺物の出土はなく時期は不明である。最下層で橙色シルトの地山である７層を確認したが、７層はさらに３つに分けることができ、特に下層の７ｃ層は 40cm 前後の花崗岩礫を多量に含んでいる。

この地山は西から東に向けて強い角度で傾斜し、トレンチの中ほどで平坦面を形成している。７ｃ層のわずかな傾斜を本来の地山の傾斜と考えるならば、明らかに人為的な掘削に



４トレンチ
1. 暗灰色細砂（耕作土）
2. 暗茶褐色礫質細砂
3. 暗茶褐色礫質細砂
4. 暗灰褐色礫質細砂
5. 暗茶褐色礫質シルト質細砂
6. 暗黄灰褐色シルト
7a. 赤褐色シルト（地山）
7b. 橙色シルト（地山）
7c. 橙色シルト（40cm 前後の花崗岩礫を多く含む、地山）

図８　４トレンチ北壁土層断面図

伴う平坦面と考えることができるが、狭い範囲での検出であることからその性格は不明と言わざるをえない。直上の５・６層から瓦器の破片が出土しているため、それほど古い時期の掘削ではないであろう。

５．遺物（図９～11）

本発掘調査で出土した遺物は細片がほとんどであるが、コンテナ１箱程度の分量がある。その中には弥生土器、土師器、須恵器、黒色土器、瓦器、陶磁器、瓦、石器、サヌカイト片が含まれるが、特に主体となるのは７割弱を占める土師器と３割弱を占める須恵器であり、その他のものはごく僅かな数量しか出土していない。図化に耐えうるものも大半は流入土から出土したものであるが、遺構に伴うものとしては溝３、ピット１から出土したものがある。以下に、それらの詳細を出土位置ごとに述べる。

溝３（図９－１～３・５～８）１～３は須恵器杯身の口縁部片である。それぞれの大きさは、１は復元口径 13.0cm、たちあがり高 1.0cm、２は復元口径 11.4cm、たちあがり高 1.3cm、３は復元口径 11.0cm、たちあがり高 0.9cm である。それぞれの復元口径は小片のため確度はあまり高くない。いずれも焼成は良好で、内外面に回転ナデが施され、口縁端部は丸くおさめる。田辺昭三による須恵器編年の TK43 ～ TK209 型式ごろと考えられる（田辺 1966・1981）。

５は須恵器高杯形器台の杯部片で、破片の下端には脚部の剥離痕がある。残存高 3.6cm、器厚約 0.8cm で、焼成は良好である。外面には回転ナデ、内面には不定方向のナデが認められる。外面上部に１条の凹線と、さらにその上部に鋸歯文と思われる線刻が認められ、鋸歯文の中を右下がりの斜線で充填する型式のものと思われる。明確な時期はわからないが、初期須恵器の範疇で捉えられるものであろう。

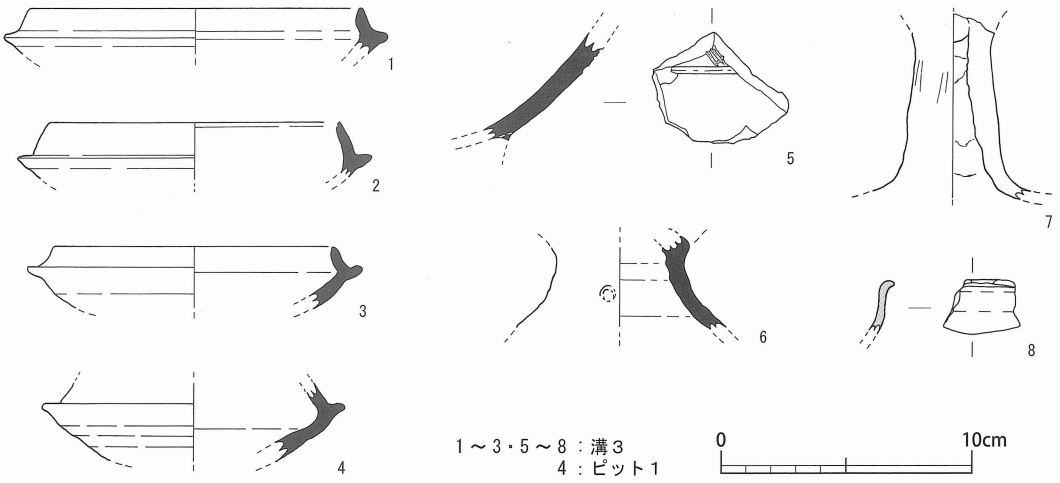


図９　溝３・ピット１出土遺物実測図

6は須恵器の短脚高杯と思われる脚部片で、破片上端には杯部の剥離痕がある。残存高2.8cmで、焼成は良好である。脚部中位に円形の透孔が穿孔されているが、穿孔数はわからない。内外面に回転ナデが施されている。

7は土師器高杯の脚部片で、破片上端には杯部の剥離痕がある。残存高6.2cm、焼成は良好であり、中空の脚柱部上部に小さな円盤を充填している。外面調整は磨耗で不明瞭ながらミガキが施されたと考えられ、工具の痕跡が認められる。内面の調整は非常に荒い。脚部の製作技法から、古墳時代中期のものであろう。

8は陶器の口縁部片で、内外面ともに茶褐色の色調を呈する。残存高2.2cm、器厚0.3cmと薄手で、口縁端部は強く外反する。

ピット1（図9－4）4は須恵器杯身の受部片で、復元受部径は12.0cm、残存高3.1cmである。ただし、受部の1/10程度しか残存しないため、径復元の確度はあまり高くない。焼成は良好で、内外面ともに回転ナデが施される。

遺構基盤層（図10－26・29）26は須恵器の脚部片である。破片下部における復元径17.7cm、残存高3.4cmで、外面に3条の凹線とそれを切って波状文が施される。波状文はやや不明瞭だが、ストロークが大きい点が特徴である。復元径の大きさから高杯形器台の脚部である可能性が高い。

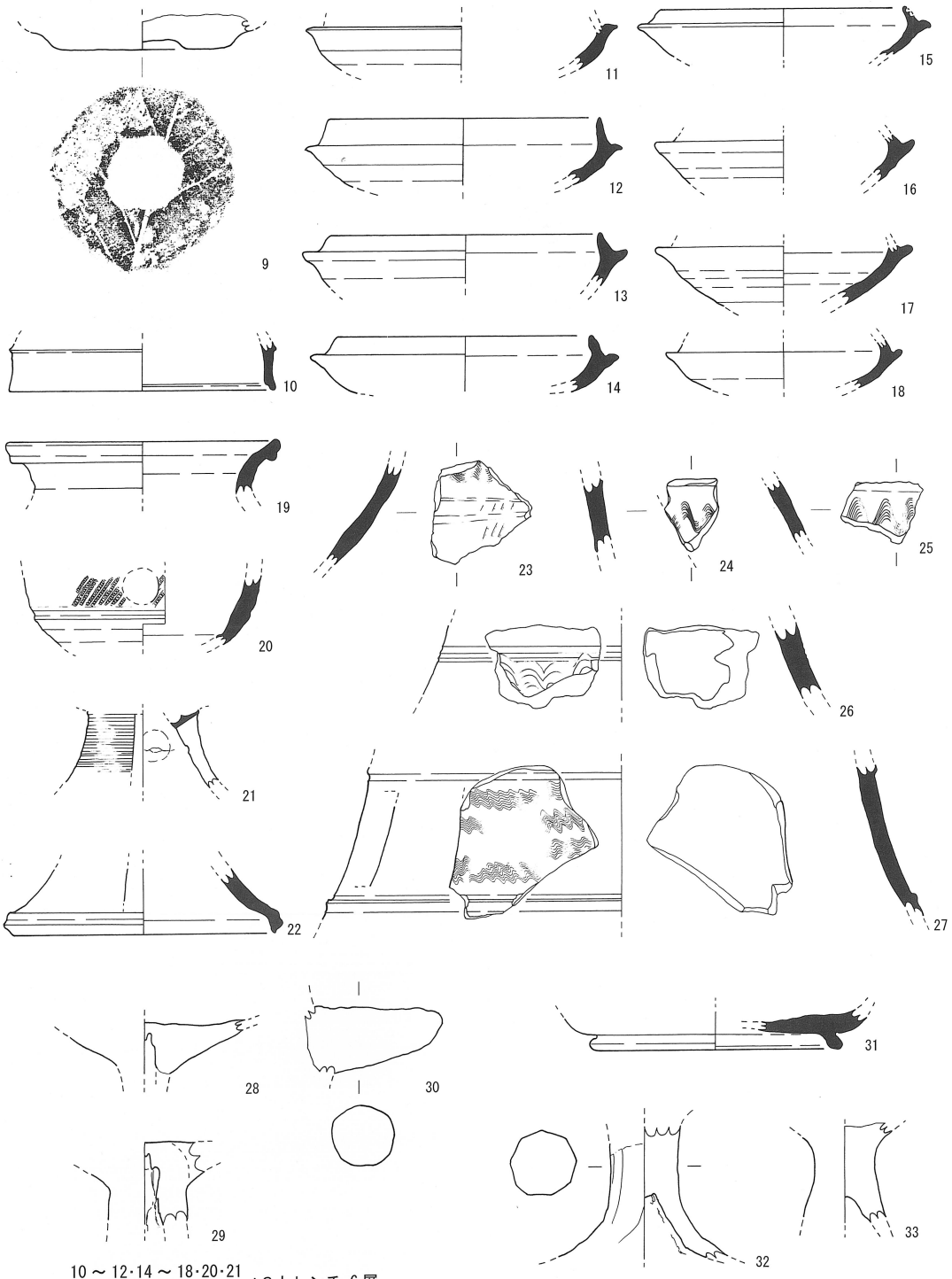
29は土師器高杯の杯部と脚部の接合部の破片である。残存高3.4cmで、杯部底面に円形の刺突痕が認められる。脚部内面には絞り痕が残る。

流入土（図10－9～25・27・28・30～33、図11）9は弥生土器の底部片で、底径8.0cm、残存高1.5cmである。上面は全体が剥離しており、粘土紐の接合部であったと考えられる。底面には木の葉の圧痕がついており、中央は径3cm強の窪みがある。底径の大きさを踏まえると、大型の鉢形土器などが考えられる。

10は須恵器杯蓋の口縁部片で、残存高は2.1cmである。焼成は良好で、天井部と体部の境および口縁端部には明瞭な段が形成されている。幅約3cmの小片であり、図の口径は形態の特徴から想定した任意のものである。

11～18は須恵器杯身の口縁部～受部の破片である。小片のため径はいずれも復元によるものだが、それぞれの大きさは、11は受部径13.8cm、12は口径12.0cm、たちあがり高1.2cm、13は口径12.0cm、たちあがり高0.8cm、14は口径11.0cm、たちあがり高0.9cm、15は口径10.8cm、たちあがり高0.6cm、16は受部径11.6cm、17は受部径11.8cm、18は受部径10.6cmである。いずれも残存高は2～3cm程度で、焼成は良好、内外面に回転ナデが施される。11・12は受部に近い位置まで回転ヘラケズリが行われており、17にも範囲は狭まっているが認められる。口縁端部の残っているものは全て丸くおさめられており、14・18の受部には沈線状の窪みが巡っている。

19は須恵器の口縁部片で、復元口径12.2cm、残存高2.4cmであるが、小片のため径復元の確



10～12･14～18･20･21
23～25･27･28･30～33 ：3トレンチ 6層
9 ： 〃 10層
13･19･22 ： 〃 12層
26･29 ： 〃 16層（遺構基盤層）

0 10cm

図10　流入土・遺構基盤層出土遺物実測図

度は高くない。焼成は良好で、頸部から強く外反する形状を呈し、端部は肥厚する。その形状から壺や甕の口縁部と考えられる。

20は須恵器瑳の体部片で、小片のため復元の確度は高くないものの、残存最大径10.6cm、残存高2.1cmである。焼成は良好で、体部中央に径1.6cm程度の円孔があけられている。円孔の下方には1条の凹線が施され、その上に櫛描列点文が反時計回りにめぐらされる。調整は回転ナデによるが、底部付近にのみ回転ヘラケズリが施される。

21・22は須恵器短脚高杯の脚部片と考えられる。21は最小径4.8cm、残存高3.5cmであり、2つの長方形の透孔が90度の位置にみられるため4方向にあけられていたと考えられる。焼成は良好で、外面には全体にカキメが施される。22は脚端部径11.6cm、残存高2.9cmで、ゆるやかに外反しながら端部で下方に突出する形状である。長方形の透孔が一部に残存しているが、1段中の透孔の数はわからない。

23は須恵器高杯形器台の杯部片で、残存高は4.5cmである。破片中位に不明瞭ながら2条の凹線が確認でき、その上部に波状文が施される。焼成は良好で、破片の右下部分にナデに先行する格子タタキがわずかに確認できる。

24・25・27は須恵器の脚部片である。器種については確実でないが、27は復元径の大きさから高杯形器台の脚部である可能性が高い。いずれも焼成は良好である。24は残存高3.2cmで、三角形の透孔の一部が残っている。上部に凹線の一部が認められ、その下に7本の波状文が施される。25は残存高2.7cmで、外面に8本の波状文が施される。27は破片下部における復元径26.6cm、残存高6.8cmで、下端に突線がめぐり、上端にもナデによる横方向の窪みが認められるが、突線に伴うものかは判然としない。それらの間には8本の波状文が4条にわたって施され、長方形の透孔があけられる。ただし、一段中の透孔の数はわからない。

28は土師器高杯の杯部と脚部の接合部の破片である。残存高2.4cmで、杯部底面に円形の刺突痕が認められる。

30は土師器の把手で、長さ6.1cm、高さ約3.0cmである。断面は円形を呈し、切り込み等の所作はなされていない。

31は須恵器杯Bの底部片で、復元底径10.8cm、高台高0.7cm、残存高1.7cmである。貼り付け輪高台が底部の内側寄りに位置し、外開きになっている。

32・33は土師器高杯の脚部片である。いずれも脚柱部は中実で、32は脚柱部径3.0cm、残存高7.2cmで、脚柱部の断面形は9角形を呈する。33は脚柱部径2.7cm、残存高4.9cmで、脚注部の断面は多角形を呈するが、磨耗が激しくその面数は判然としない。

34は両黒の黒色土器の口縁部片で、復元口径14.4cm、残存高4.7cmである。深い体部をもち、口縁部はやや外反する器形である。外面には横方向のヘラミガキが認められ、内面は口縁部には横方向の、体部には右方向に傾く斜め方向のヘラミガキが施されている。

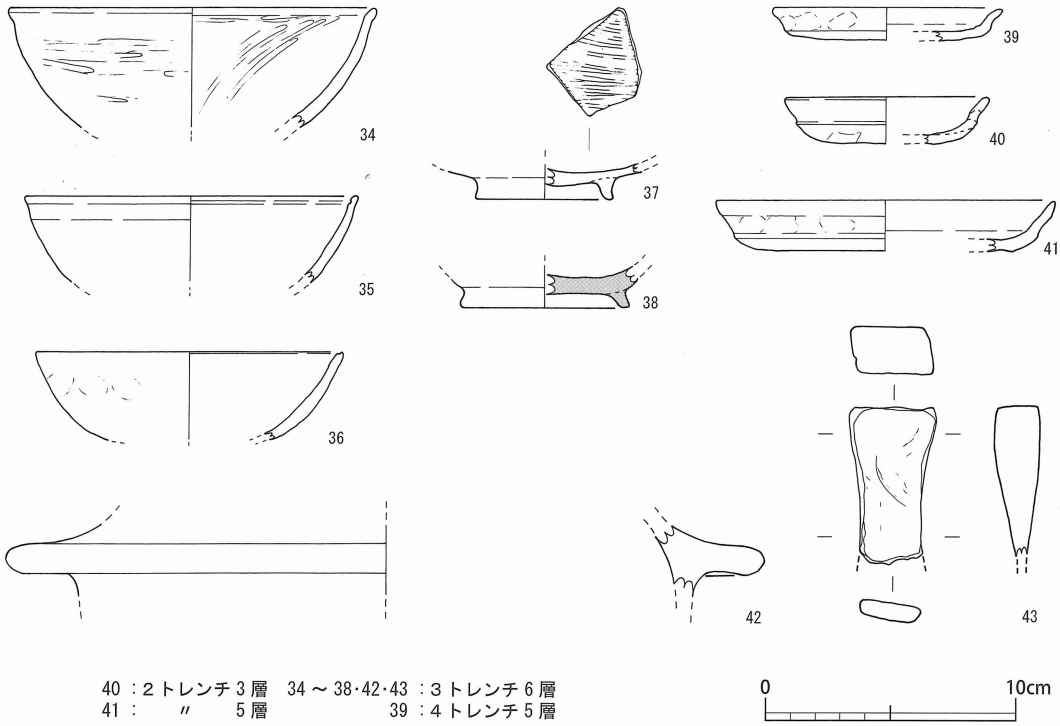


図 11　流入土出土遺物実測図

35・36 は瓦器椀の口縁部片である。35 は復元口径 13.1cm、残存高 3.3cm で、口縁部内面に 1 条の沈線を施した椀口縁 C である（松本編 1988）。内外面のヘラミガキは磨耗のため単位等が判然としない。36 は復元口径 12.0cm、残存高 3.5cm で、口縁端部に沈線を施した椀口縁 D である。内外面のヘラミガキは磨耗のため単位等が判然としないが、体部外面中位に指頭圧痕が認められる。

37 は瓦器椀の底部片で、復元底径 5.4cm、残存高 1.4cm である。貼り付け輪高台の形態は高台 B であり（松本編 1988）、高台の高さは約 0.8cm である。見込み部には平行線状暗文が施されている。

38 は灰釉陶器椀の底部片で、復元底径 6.8cm、残存高 1.6cm である。貼り付け輪高台はやや外方にふんばる形状をしており、高台高は約 0.6cm である。高台の内側にはロクロ左回転の回転糸切りの痕跡が残っている。灰釉の付着が認められないことから、内外面全体にハケヌリを施す古い段階のものではなく、ツケガケを行う段階のものと考えられる。

39 ～ 41 は土師皿の底部から口縁部にかけての破片である。39 は復元口径 9.1cm、器高 1.3cm の小型で、口縁部が外反し底部との境に稜を形成する土師皿 D に該当する（松本編 1988）。内外面ともに磨耗が激しいが、外面にわずかに指頭圧痕が確認できる。40 は復元口径 8.1cm、器高 1.9cm の小型であるが、口縁部の残りが悪いため、径復元の確度は高くない。39 と同じく土師皿 D に該当し、底部外面にケズリが施される。41 はややゆがみがあるが復元口径 13.3cm、器高 2.0cm の

大型で、土師皿Dに該当する。体部外面には指頭圧痕が認められ、底部外面にはケズリが施される。

42は土師器羽釜の鍔部片で、復元鍔部径30.0cm、鍔部幅約3.0cm、残存高2.8cmである。鍔部の端部は丸くおさめ、下面には煤が付着している。

43は砥石の破片で、砂岩製とみられる。残存長6.1cm、最大幅3.5cm、最小幅2.4cm、厚さは最大1.8cm、最小0.4cmである。擦痕は一部に観察することができるが、全体的に不明瞭である。

6．総括

今次調査では、工事により掘削される調整池設置部分等を対象に発掘調査を実施した。調査地の南東部では、平成元年に行われた名柄小学校の体育館新築に伴う発掘調査（第2次調査）により、古墳時代中期後半の居館跡が検出されているため、関連する遺構の検出が予想された。

しかし、調査面積や掘削深度の関係もあろうが、今次調査地において当該期の遺構は検出されず、時期不詳の流路や中世以降の溝、ピットが検出されたのみであった。今次調査地と第2次調査地の間には小さな河川が流れており、第2次調査地北西端においても現在の河川と同一方向の旧河道が検出されている。以上の点から、古墳時代中期後半の遺構群は旧河道を越えて北側には広がらない可能性も考えられる。今後の周辺調査によって居館跡の範囲や周辺の実態が明らかになることを期待したい。

参考文献

秋山日出雄・網干善教 1959『室大墓』奈良県史蹟名勝天然記念物調査報告第十八冊　奈良県教育委員会

網干善教 1959「御所市大字室　みやす古墳」『奈良県史跡名勝天然記念物調査抄報』第十二輯　奈良県教育委員会

網干善教 1961a「御所市森脇吐田平古墳群」『奈良県文化財調査報告（埋蔵文化財編）』第四集　奈良県教育委員会

網干善教 1961b「御所市古瀬「水泥蓮華文石棺古墳」及び「水泥塚穴古墳」の調査」『奈良県史跡名勝天然記念物調査抄報』第十四輯　奈良県教育委員会

梅原末治 1922「大和御所附近の遺蹟研究」『歴史地理』第参拾九卷　第四號　日本歴史地理學會

近江俊秀編 1993『鴨神遺跡－第2次～第4次調査－』奈良県文化財調査報告書　第66集　奈良県立橿原考古学研究所

河上邦彦 2001「大和巨勢谷権現堂古墳の測量調査と副葬品（後期大型円墳の意義）」『実証の地域史－村川行弘先生頌寿記念論集－』大阪経済法科大学出版部

河上邦彦・亀田博・千賀久編 1976『葛城・石光山古墳群』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第31冊　奈良県教育委員会

河上邦彦・木下亘編 2004『巨勢寺』奈良県立橿原考古学研究所調査報告第87冊　奈良県教育委員会

北中恭裕編 2007『極楽寺ヒビキ遺跡』奈良県文化財調査報告書　第122集　奈良県立橿原考古学研究所

木許　守編 1991『中西遺跡－第3次発掘調査報告－』御所市文化財調査報告書　第10集　御所市教育委員会

木許　守編 1992『鴨都波　11次　発掘調査報告』御所市文化財調査報告書　第11集　御所市教育委員会

木許　守編 1995『名柄遺跡　第4次　発掘調査報告』御所市文化財調査報告書　第19集　御所市教育委員会

木許　守編 1996『室宮山古墳範囲確認調査報告』御所市文化財調査報告書　第20集　御所市教育委員会

木許　守編 2007『巨勢山古墳群Ⅵ』御所市文化財調査報告書　第30集　御所市教育委員会

木許守・濱慎一・米田裕貴子・岡田圭司・佐々木健太郎・西村慈子 2009『京奈和自動車道関連遺跡発掘調査概報Ⅱ　平成20年度調査の概要』御所市文化財調査報告　第35集　御所市教育委員会

木許守・濱慎一・西村慈子・佐々木健太郎 2010『京奈和自動車道関連遺跡発掘調査概報Ⅲ　平成21年度調査の概要』御所市文化財調査報告　第37集　御所市教育委員会

楠本哲夫編 1978「御所市掖上鑵子塚前方部周濠発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報　1977年度』奈良県立橿原考古学研究所

御所市教育委員会 1989『ゴルフ場開発事業に伴う　第1回　巨勢山古墳群発掘調査成果の現地説明会資料』

御所市教育委員会 1990『ゴルフ場開発事業に伴う　第2回　巨勢山古墳群発掘調査成果の現地説明会資料』

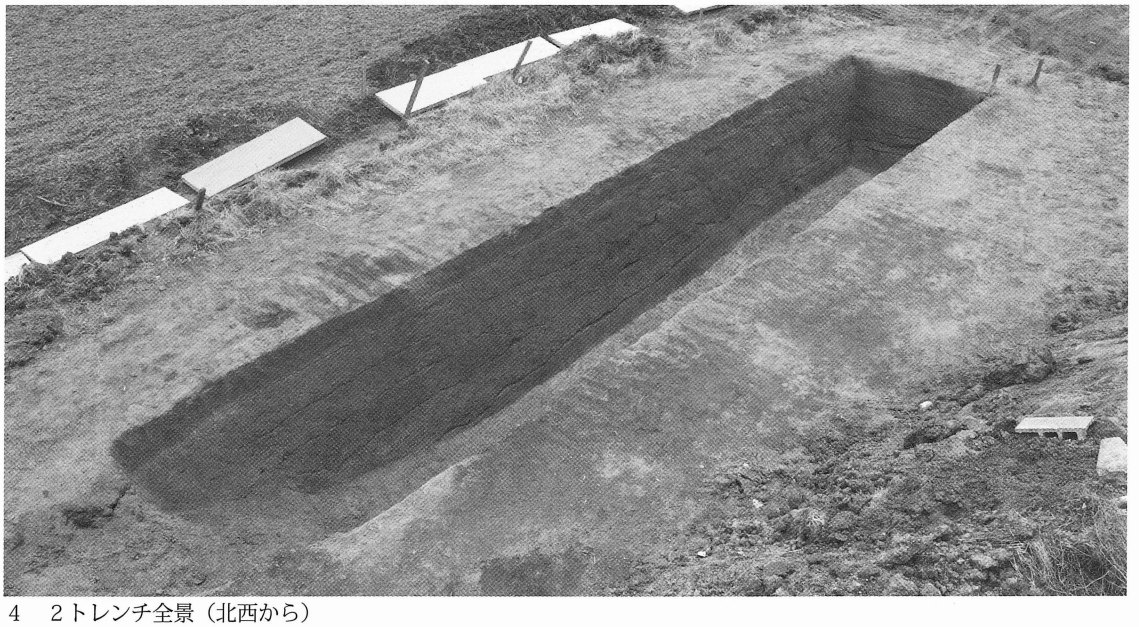
御所市教育委員会編 2001『鴨都波１号墳　調査概報』学生社
御所市教育委員会編 2003『古代葛城とヤマト政権』学生社
阪本晋通編 2002『鴨都波 16 次発掘調査報告－附．平成 12・13 年度　個人住宅建築に伴う市内遺跡発掘調査－』御所市文化財調査報告書　第 27 集　御所市教育委員会
佐々木健太郎 2012『名柄遺跡　第６次　発掘調査報告』御所市文化財調査報告書　第 41 集　御所市教育委員会
佐々木好直編 1999『南郷遺跡群Ⅱ』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第 73 冊　奈良県教育委員会
佐藤小吉 1916「權現堂古墳」『奈良縣史蹟勝地調査會報告書』第三回　奈良縣
島本　一 1938「琴柱形石製品の新例」『考古學雜誌』第二十八卷　第六號　考古學會
十文字健編 2007『ドンド垣内古墳群』奈良県文化財調査報告書　第 119 集　奈良県立橿原考古学研究所
白石太一郎 1974「御所市石川古墳群」『奈良県の主要古墳Ⅱ』奈良県教育委員会
末永雅雄 1932「南葛城郡葛城村西北窪　和田山古墳」『奈良縣史蹟名勝天然記念物調査會抄報』第二輯　奈良縣
関川尚功 1989「室大墓古墳外堤部発掘調査報告」『奈良県遺跡調査概報　1988 年度』第２分冊　奈良県立橿原考古学研究所
高橋健自 1919「南葛城郡名柄發掘の銅鐸及銅鏡」『奈良縣史蹟勝地調査會報告書』第六回　奈良縣
田辺昭三 1966『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古学クラブ
田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店
豊岡卓之 1989「鴨都波遺跡第７次発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報　1988 年度』第１分冊　奈良県立橿原考古学研究所
奈良県教育委員会 1980「新宮山古墳」『奈良県指定文化財－昭和 54 年度版－』
奈良県立橿原考古学研究所 2011『中西遺跡第 18 次調査～弥生時代前期水田の調査～』(2011 年 11 月 12 日　現地説明会資料)
坂　靖編 1996『南郷遺跡群Ⅰ』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第 69 冊　奈良県教育委員会
坂　靖編 2000『南郷遺跡群Ⅳ』奈良県立橿原考古学研究所調査報告第 76 冊　奈良県立橿原考古学研究所
廣岡孝信 2002「北窪遺跡」『奈良県遺跡調査概報　2001 年度』第三分冊　奈良県立橿原考古学研究所
廣岡孝信 2006「二光寺廃寺」『奈良県遺跡調査概報　2005 年』第二分冊　奈良県立橿原考古学研究所
廣岡孝信・十文字健 2005「北窪遺跡 2004 －第１次調査　伏見遺跡 2004 －第１・２次調査」『奈良県遺跡調査概報　2004 年』第二分冊　奈良県立橿原考古学研究所
藤田和尊 1987「御所市・小林遺跡の調査」『季刊明日香風』第 23 号　財団法人飛鳥保存財団
藤田和尊 1991「奈良県御所市名柄遺跡」『日本考古学年報』42（1989 年度版）　日本考古学協会
藤田和尊編 1985『巨勢山境谷 10 号墳発掘調査報告』御所市文化財調査報告書　第４集　御所市教育委員会
藤田和尊編 1987『巨勢山古墳群Ⅱ－御所市みどり台総合開発事業に伴う発掘調査１－』御所市文化財調査報告書　第６集　御所市企画課
藤田和尊編 1994『檜原遺跡Ⅰ』御所市文化財調査報告書　第 17 集　御所市教育委員会
藤田和尊編 2002『巨勢山古墳群Ⅲ』御所市文化財調査報告書　第 25 集　御所市教育委員会
藤田和尊・尼子奈美枝編 1992『鴨都波　12 次　概報』御所市文化財調査報告書　第 12 集　御所市教育委員会
藤田和尊・木許守編 1999『台風７号被害による室宮山古墳出土遺物』御所市文化財調査報告書　第 24 集　御所市教育委員会
藤田三郎・豆谷和之 2003「第２節　奈良県における土器編年」『奈良県の弥生土器集成　本文編』橿原考古学研究所研究成果第６冊　奈良県立橿原考古学研究所
前園実知雄・関川尚功・中井公 1978「御所市朝妻廃寺発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報　1977 年度』奈良県教育委員会
松田真一 1997『奈良県の縄文時代遺跡研究』財団法人由良大和古代文化研究協会
松田真一・近江俊秀・清水昭博 1993「御所市高宮廃寺について」『青陵』第 83 号　奈良県立橿原考古学研究所
松本洋明編 1988『十六面・薬王寺遺跡』奈良県史跡名称天然記念物調査報告第 54 冊　奈良県立橿原考古学研究所
本村充保 2009「観音寺本馬遺跡－京奈和自動車道（観音寺Ⅰ区）－」『奈良県遺跡調査概報　2008 年』第三分冊　奈良県立橿原考古学研究所
米川仁一・菊井佳弥 2010「秋津遺跡」『奈良県遺跡調査概報　2009 年度』第三分冊　奈良県立橿原考古学研究所

図　版

1　1トレンチ全景（南西から）

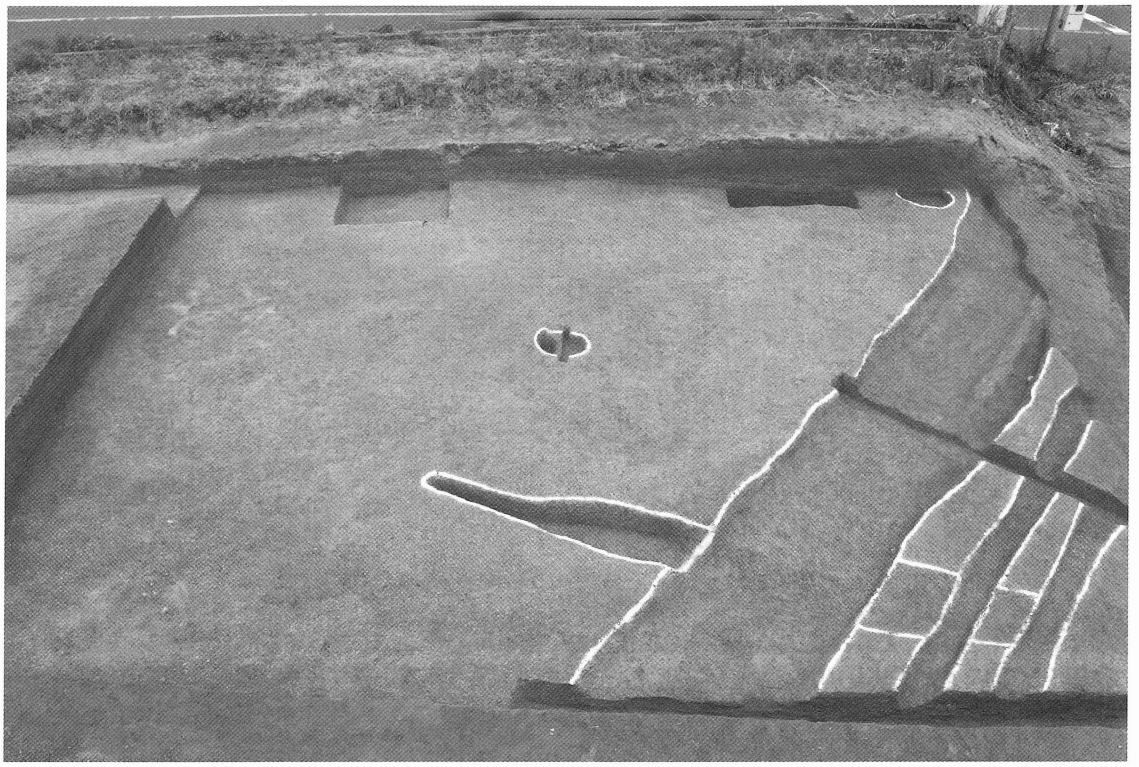
2　1トレンチ流路断面（西から）

3　1トレンチ暗渠（南西から）



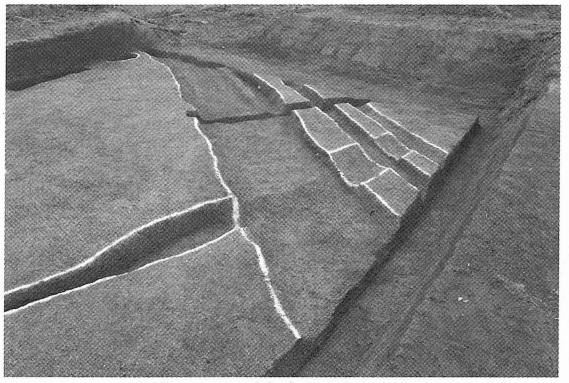
4　2トレンチ全景（北西から）

図版2

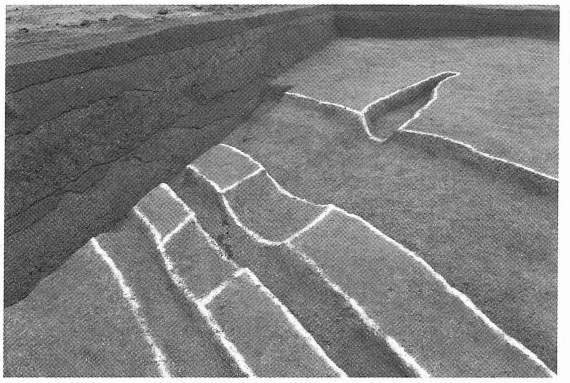


1　3トレンチ全景（東から）

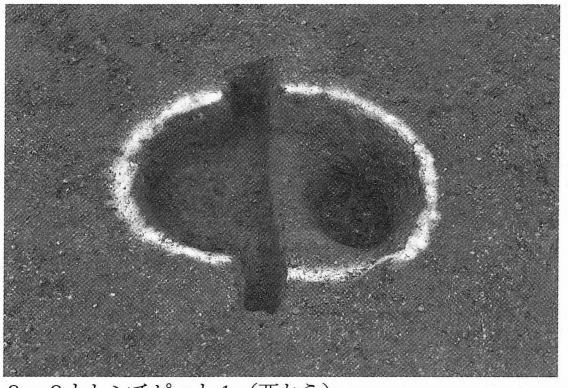
2　同（北から）



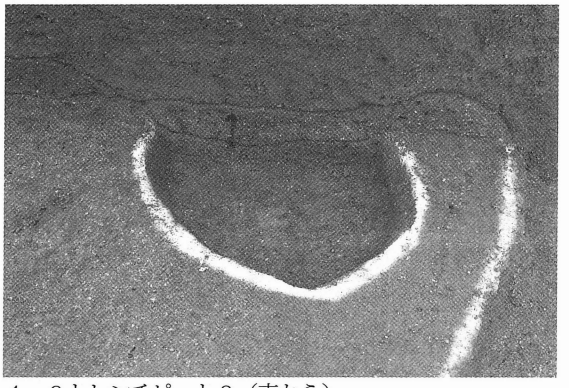
1　3トレンチ溝1～3（南東から）



2　3トレンチ溝4（北西から）



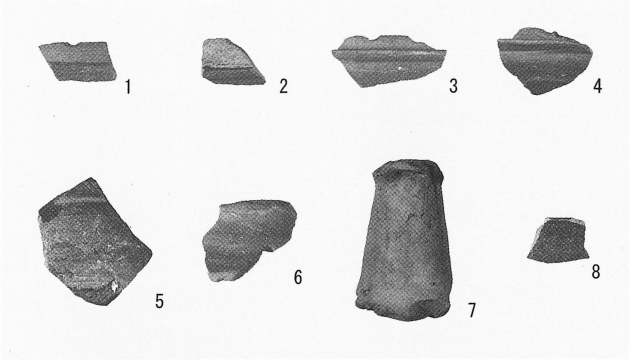
3　3トレンチピット1（西から）



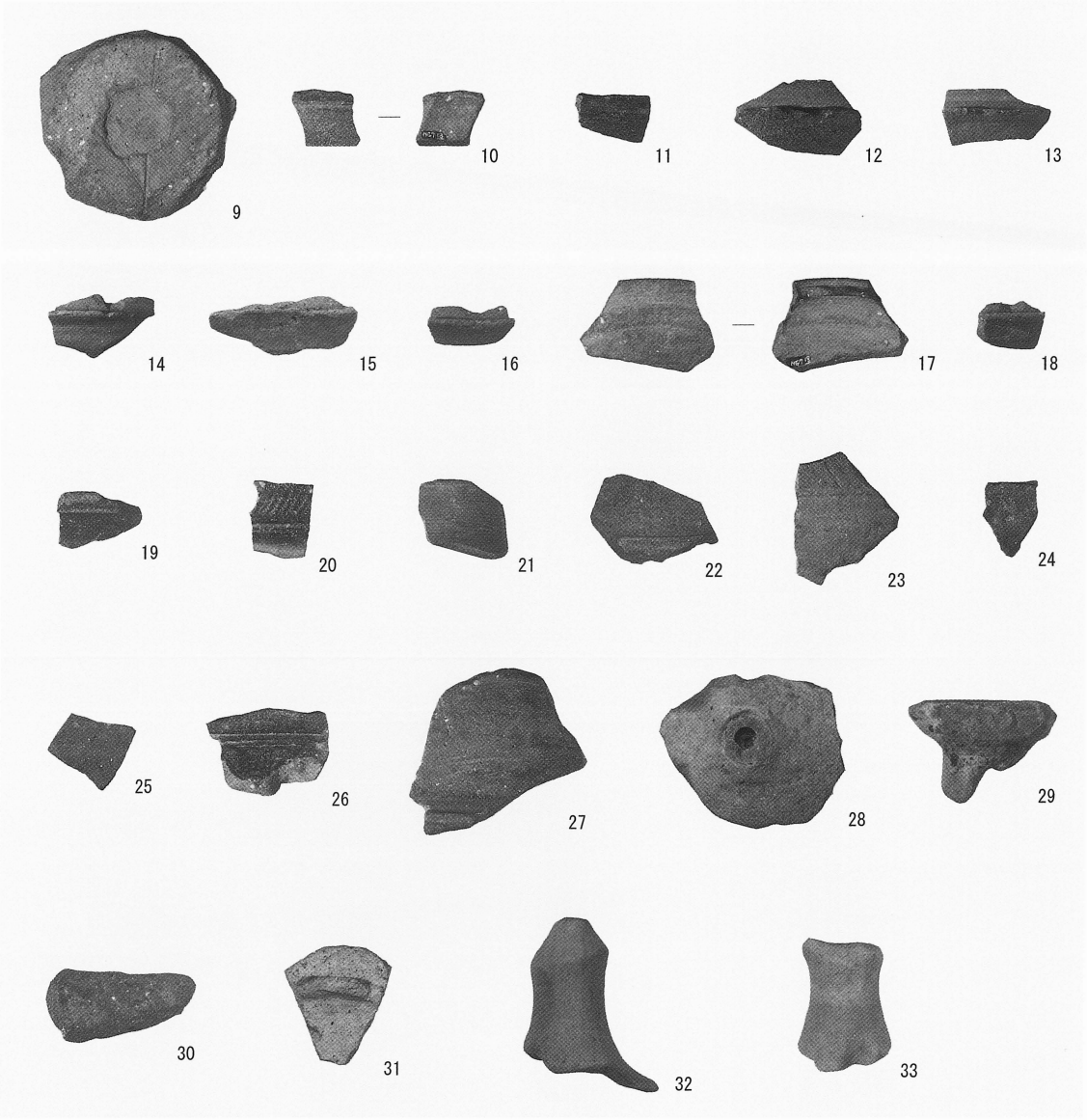
4　3トレンチピット2（東から）

5　4トレンチ全景（南東から）

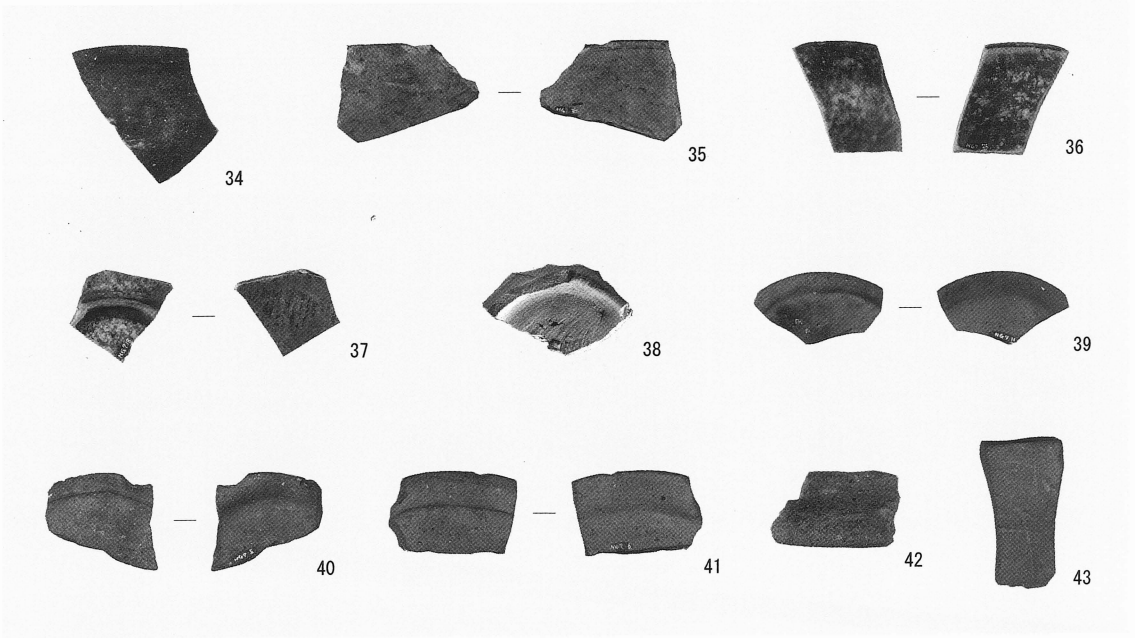
図版4



1　溝３・ピット１の出土遺物（S ≒ 1/3）



2　流入土・遺構基盤層の出土遺物（S ≒ 1/3）



流入土の出土遺物（S ≒ 1/3）

報告書抄録

ふりがな	ながらいせき
書　　名	名柄遺跡
副 書 名	第7次発掘調査報告
シリーズ名	御所市文化財調査報告書
シリーズ番号	第44集
編著者名	金澤雄太
編集機関	御所市教育委員会
所 在 地	〒639-2277　奈良県御所市室102番地　ＴＥＬ 0745-60-1608
発行年月日	2013年3月29日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
ながらいせき 名柄遺跡	ごせし 御所市 ながら 大字名柄	29208		34°26′ 32″	135°42′ 53″	20120528 ～ 20120605	149	記録保存調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
名柄遺跡	集落	古墳	流路1、暗渠1 溝5、ピット2		弥生土器、土師器、須恵器、灰釉陶器、黒色土器、瓦器、陶磁器、砥石			

奈良県御所市

名　柄　遺　跡

－第7次発掘調査報告－

御所市文化財調査報告書　第44集

平成25年（2013年）3月29日

編集・発行　御所市教育委員会

御所市室102番地

印　　刷　株式会社　笹田印刷所

御所市今住16－3